

「めぐり」から考えさせられること

金光教教学研究所 高橋昌之

はじめに

■いま「めぐり」とは

- ・『金光教学』第 61 号に「「めぐり」という言葉にみる信心の姿」という論文を発表。
- ・かつてはよく聞かれたが、最近は余り語られなくなった「めぐり」という言葉。
- ・私自身は、「高橋の家は「めぐり」が深いから信心しなければ」と親から言われて育った。

- ・「めぐり」とは
 - 「親先祖や自分が積んだ「めぐり」によって、自分だけでなく子孫まで難儀する」といった具合に語られてきた。
 - 仏教でいう、「業」「宿業」といった言葉に近いと考えられる。

- ・明治大正期の教内紙誌には頻繁に登場する「めぐり」。
しかし今日の教内新聞等、公の場では殆ど見られなくなった。
 - この言葉が持つ、独特の重さや、おどろおどろしさが影響している？
 - 教会の先生から「めぐり」を指摘され、落ち込んだという信徒の事例(「教学に関する交流集会」)。
 - しかし「めぐり」は淘汰されたわけでもない。信徒の間で、「私の家は「めぐり」が深い」「徳を積んで「めぐり」を減らす」と語られたりする。
 - また教師からは、教話では「めぐり」について話せるが、取次の場で信者に「めぐり」を指摘するのは難しい、との声が聞かれる。

■他宗教の例

- ・仏教における「前世の業」「自業自得(前世の種蒔きが悪かった)」といった言葉。
 - 被差別部落、病気、障害などに関する、差別的視線を合理化してきた歴史が問題化される。

・中村久子(明治 30 ～昭和 43 年)

幼少期のしもやけによる突発性脱疽で四肢を失う。彼女は少女時代から見世物芸人として各地を回る生活を送った。

- 立派な肩書きのある宗教者も含め「あらゆる人」から、「あんた、まア可哀相に手も足も無いんじゃないアー、前世の業じゃでなアー、この世は「業」はたしじゃで、しんぼうしんさいなアー」「この世で手も足も無いなんてことは、あんたに何かたたっているんじゃないアー、たたりだから「業」だと思ってあきらめるんじゃないアー、あきらめんさいなアー」と言われて育った。



→後に中村は請われて講演するなかで、ある人物を通じて親鸞の教えに出会う。宗教者を訪ねて親鸞の教えを聴き、仏書を読み漁る日々へ。

→そこから彼女は、不自由な身体が自分を「真実の道」に導いたと捉えるように。

「宿業」を通じて念仏し、悩み苦しみを感謝や喜びに変えていく道を語っている(中村久子『このろの手足』春秋社、1978年)。

■説明して済まない教義の問題

- ・「めぐりとは、天地の道理にはずれた生き方が積み重なり、それが原因となり結果となり、めぐりめぐってマイナスの作用を持つものをいいます。めぐりはそれ自体が信心上の意味をもつというより、「どのようなおおきなめぐりがあっても、信心によって取り払ってもらえる」とあるように、めぐりへの意識が、かえって信心のエネルギーを燃え立たせる点に、意味を持っている、といえるでしょう。」(『神と人 共に生きる——金光教 教義の概要』金光教本部教庁、平成5年、147～148頁)
- ・「先祖からの無礼、罪、めぐりなどといったものが、いかに強固なものであろうと、神の大きな慈しみの中では、ひなたの氷のように氷解する、とされます。ここでも、神の慈しみに包まれて、人間のおおびが成り立っていることが、確認されるでしょう」(同 197頁)
- ・「めぐり」については、教祖の教えを参照しながら説明することが出来る。しかし上で見てきたように、人々の救済に関しては説明するだけでは済まない問題があるのでは？
→現在、この言葉が説きにくくなっているならば、そこにどのような信心の課題が確認されるのか？

「めぐり」はどのように語られてきたのか？

■「めぐり」と因果論

- ・明治30年代から教内新聞には、「めぐり」が頻繁に登場している。
→「因果」「罪障」「罪業」「循環」等のあて字が用いられる場合もある。
- ・その中でも、仏教用語の「因果」との比較で「めぐり」を説く例に注目される。
「仏教ではいう因果、金光教でいえばお前の身の循環めぐりの深き故…」(『みかげ』第9号、明治34年8月15日)
→仏教を通して世間に広がっていた因果論。その因果論を利用して、金光教の「めぐり」を説明していた。
→善い行為(善因)には善い結果(善果)、悪い行為(悪因)には悪い結果(悪果)が生じると説かれる。中村久子に対する人々の言葉づかいを彷彿とさせる。
- ・因果論を用いた「めぐり」の説明は、当時の金光教で説得力を持った。
→神の思いにかなわない振るまいが「めぐり」となり、さまざまな困難が引き起こされる。
→しかしその困難な出来事は、信心によって乗り越えられる。
→「運命」「宿命」として諦める必要が無い。金光教のあらたかさが説かれる。

本教に所謂めぐりはこの道徳的因果応報の理を含むと共に、肉体的遺伝、例之ば、悪疾患の^{たとへ}子がその素質を遺伝して生れ、暴飲家の子孫に、大酒家が出来、親の淫乱のため、その子が罪なきに梅毒に苦しんだりする。方今学界に唱へる、遺伝論の事実も、めぐりの為と云ひ、又親先祖の不道徳心が遺伝し、又躰けられて、自己の本心が麻痺して、悪とも心付かず、非とも悟らず、只無意識的に、非事悪業を敢てする底の、心靈的低級者の生ずるもめぐりの然らしむる所と説くのである。即ち、めぐりと称するは道徳的、肉体的、心靈的の各方面に渉る因果の理を総括するのである。[···]即ち、金光教の信仰によれば、我々に纏ひついて不幸に導く一切のめぐりは悉皆取払はれて、清浄無垢の身となり、神の分霊は内発的に、障らるる事なしに其の光を顕して、修養すれば、吾人の使命をも全うし得ると云ふ生活の一新生面が開かれるのである。

(田中治良「運命に就て」『金光教徒』第91、92号、大正4年7月10、22日)

→この因果論的な「めぐり」の解釈は、個人に「めぐり」を自覚することを求める。

→「めぐり」が強迫観念のように作用し、信仰から遠ざかる人もあった。

■ 「めぐり」言説の相対化

・上記のような、因果論的な「めぐり」言説を相対化する動きが出てくる。

→高橋正雄、片島幸吉など

[···]難儀は不心得からと云うても、自分の不心得からでなしに、苦んで居る人が多くあります。先祖のメグリとも云はれますが、どうもそれはよく分りませぬ。固より我々は自分の養生に於ても心得方に於ても、完全無欠とはよう云ひませぬ。先祖も我々の先祖はメグリを積んだであります。私共自身も日に日にメグリばかり積んで居ります。そのために病気になるのだ、不幸に陥るのだと云ふ事であれば、それは云うて行く所はありませぬ。身から出た錆で、寧ろ一生苦み通すのが私共に取っては当たり前であります。併しそれでは人生は残酷極まる。これが衛生法や道徳乃至宗教の云ひ分であるならば、衛生も道徳も宗教も人生を救ふものにはあらずして、人生を苦しむるものである。[···]

(高橋正雄「不幸と信心」(「説教」『金光教徒』第81号、大正4年4月1日))



・そもそも人間は誰もが「めぐり」を積み続け、「めぐり」と不離の存在だとされる。

→個人の信心で、「めぐり」を取り払ったり、幸福になったりするのとは不可能。

→だからこそ人は神に縋らねばならない。縋るべき神に信心することが幸福だと説かれる。

→信心さえすれば助かるという、一種の万能論になり、難儀な人を置き去りにする恐れがある。

・もともと高橋自身、この時期には実生活と信心の乖離かいりに苦しんでいた。

→上の文章も、悩みながら書いていたのか？

- ・片島も、過度に「めぐり」を自覚して自縄自縛に陥る悪影響を指摘していた。
→「めぐり」を気に病まず、そのまま神に向かうことが救済になる道を説く。
- ・高橋や片島のような論は、因果論的な「めぐり」にとらわれる態度を問うている。
→しかし、従来の「めぐり」言説により苦しんでいる人が、救済されない可能性がないだろうか。

■言葉による救済の限界的様相

□『金光教徒』において展開された、ある読者(「罪深き男」)との編集者との「信仰問答」

- ・長年の病に難儀している「罪深き男」
→彼は難儀の原因を「めぐり」と考え、救いの道を尋ねた。
- ・回答者は、病気の境遇を受け容れるよう説く。高橋正雄のような考え方。
→病気の回復を願う「罪深き男」は解答に納得出来ず。
- ・「罪深き男」と回答者の問答はすれ違ったまま、その後も数回続いた……
- ・回答者は真摯に答えようとする。
→だが「罪深き男」からすると、はぐらかされた感じ？
- ・しかし「罪深き男」が自身を深く顧みる様相も見える。



『金光教徒』に掲載された「信仰問答」
(大正11年8月10日号)

□本論文を読んだ教師たちの反応

- ・「身につまされた」「自分の信心が問われた」
- ・「自分が「罪深き男」の立場なら納得出来ない」
→言葉による救済の、限界的な様相が垣間見られる。

■「めぐり」に関する「教祖」像

- ・自身の「めぐり」を取り払う「教祖」像
→川手家における、先祖以来の「めぐり」を信心で克服する「教祖」像。
→因果論的な「めぐり」言説と重なる。
- ・他人の「めぐり」を背負う、「身代わり」的な「教祖」像
→他人を助けるため、困難を受け入れる「教祖」像。 救いを求める人々の願いが生んだ「教祖」？
→高橋や片島らの説に近い。「罪深き男」に求められた姿勢。
→信仰者にとって、一つの理想とされる。しかし、そこで人の救いはどう見据えられている？

→そのような人物の一人として、中山亀太郎に注目したい。

信心を通じた関係性の意味 ——中山亀太郎への注目——

■中山亀太郎(明治 38 ～平成 17 年)

- ・幼少期に鉄道事故で重傷を負う。
- ・本教において中山は、過酷な境涯を「運命」として受け入れた人物として語られてきた。
- ・また信心により、中山家の「めぐり」を取り払ったとも受けとめられてきた。

□中山の略歴

- ・明治 38 年生まれ。中山が 4 才の時に父が炭鉱事故で死去。その後、祖母、母、姉と暮らす。
- ・5 才の時に小倉駅構内で貨車にひかれ、両手と左足を失う。
- ・学齢に達したが障害を理由に小学校入学を断られる。それを機に母親が金光教倉敷教会所に参拝するようになる。
- ・大正 3 年、9 才で中庄尋常高等小学校に入学を許される(江口市太校長)。
- ・大正 4 年、江口校長から話を聞いた佐藤範雄を通じて、中山のことが金光教内で知られる様になる。同年の『金光教徒』に紹介記事。
- ・大正 8 年、本人の希望で金光中学校に入学。一家で金光に移住。(中山は学業や生活万般に関して、佐藤金造(教頭)の世話になったと回顧している)
- ・大正 13 年、金光中学校卒業。映画の説明者を志し上京。佐藤金造を通じて長谷川雄次郎の依頼により、松竹キネマ入社。
- ・昭和 3 年、東洋大学入学。以後、働きながら倫理学と教育学を修めて中等教員の免許取得。
- ・学校や傷痍軍人施設での講演、傷痍軍人の生活指導などを行う。
- ・昭和 8 年、佐藤金造夫妻の仲人で天野八重子と結婚。後に 2 児を授かる。
- ・昭和 15 年、金光教青年会寄宿舎主事に任じられる。
- ・昭和 20 年、空襲により寄宿舎が全焼。金光へ戻る。金光教本部に奉職。
- ・昭和 21 年、教師検定試験に合格し、金光教教師に補任される。
- ・昭和 34 年～平成元年、金光教東京寮の寮監を務める。
- ・平成 17 年、死去。99 才 8 ヶ月。



□中山に関する人々の語りと、私が抱いた違和感

- ・私は生前の中山に会った経験はない。
- ・しかし色々な先輩から、中山の話は聞いていた。
- ・また教内新聞などで、たびたび中山に関する記事を目にしてきた。
→不自由な身体で、健常者以上に日常生活の全てをこなした人。

- 同じように障害を持つ、多くの人々を励ましてきた徳者。
- 「運命を愛し 運命を生かす」という言葉を体現した人生。
- 金光教の信仰によって救われた人の代表格。

- ・上記のような評価に対し、以前は特に疑問を感じていなかった。
- ・またこれらはどれも、人々にとって「正しい」中山亀太郎像であると言える。
- ・しかし、以下の中山自身の言葉を目にしたとき、私には「これまで何か大切な事が見落とされてきたのではないか」と思われた。

[...]私は、十七、八歳のころ、ある人から、「お前は、両手片足がなくなったから中学校に入れたので、もし満足なからだだったら、おそらく、今ごろは、おやじの跡を継いで鉾山の抗夫になっていただろう。両手片足のなくなったことを仕合わせだと思わなければならん。」と言われまして、極力、私が汽車にひかれて両手片足を失っていることを、慰めて下さったことがあります。

しかし、この時ほど、私は恨めしいと思ったことはありませんでした。「一本足のかかし」と言っていじめられ、「だるま、だるま」と言ってからかわれて、大きくなった私は、かなりひどいことを言われても、次第にあきらめられるようになったとでも申しますか、あまり悲しくも感じなくなっていたのですが、この時ばかりは、はらわたがらぎれるような悲しい思いをいたしました。

「たとえ、鉾山の抗夫であっても、手足が満足にそろっている方がどんなに仕合わせか知れない。手のあるあなたなんかは、手のない私の苦しみなどわかるはずはない。」と、口元まで出ましたが、言葉にならないで、はらはらと無念の涙がこぼれてきました。 [...]

(中山亀太郎「信心とおかげ」昭和32年12月25日、朝日放送、『運命を愛し運命を生かす』所収)



- ・上記は、中山が50代の頃にラジオ放送で語った言葉。30年以上前の出来事を振り返っている。
- ・放送では実名を明かしていないが、「ある人」とは佐藤金造を指すと考えられる。
 - 佐藤は中山の将来を気遣い、たびたび「お前ほど幸福な者はない…」と説いていたという*1。
- ・その彼の言葉は、10代の中山を深く傷つけていたことが明かされた。
 - 信心の言葉が、図らずも中山の苦悩を倍加する暴力に。善意の言葉に中山は反論すら出来ない。
 - 中山が経験したことの意味は、現代の我々にとっても他人事ではないのではないかと。

□信心を介した関係性の構築

- ・ところで中山がラジオ放送でエピソードを語った当時、佐藤も高齢ながら存命だった。
 - あのと時の言葉の意味を、佐藤にも問いながら生涯かけて求めていた可能性。
- ・中山と佐藤の関わり合いは、学校を卒業した後も形を変えながら続いていた。

→中山によると佐藤は、上京時の就職、結婚時の媒酌・段取り、金光教本部に勤めるための手配など、中山を気遣っていたという。

・後年、東京寮の寮生(学生)たちの見た中山。足一本で日常生活をこなし、「私は幸せです」と語る。
→中山のあり方そのものに、「無言の教え」を感じ取った寮生もあったとされる*2。

・信心を介した関係性の構築

→佐藤が中山にかけたような、相手の人生を規定する言葉。「めぐり」など。

→インパクトが大きく、苦しむ人をさらに傷つけかねない。そこで自分自身を見詰めさせられる。

→そこから、言葉をかけた相手とどのような関係性を築くことが出来るのか？

→中山の場合は、佐藤を初めとした人々との応答関係が継続していた。

→救いに向けて生まれ続ける重い問い、時間を掛けて担って行く関わりの重要さが浮かぶ。

おわりに

・今回の論文に対する、天理教の方からの反応

[...]「めぐり」という御言葉の使い方が、天理教で言うところの「個人のいんねん」、「家のいんねん」とよく似ていて、しかも近年、その説き分けが相対化されるところまで似ているので、新宗教の教えが言説として社会の変化に対応して変化せざるを得ないという共通点を見る思いでありました。 [...]

→金光教に限らず他宗教でも、かつては当たり前にかかれた事が説きにくくなっている可能性。

学生時代に出会った天理教の先生「金光教では、いんねんを説かずに人を助けられますか？」

→もともと明治末大正期から既に、「めぐり」が物議を醸していたのは見てきた通り。

→信心にとって言葉は大切。しかし言葉に頼りすぎることは、時として問題を生む。

→課題を抱える一人一人に向き合わされた信心の歴史。

世代をこえて祈りを重ねてきた、その時間に浮かぶ意味の捉えなおし。

・本論文では、個人や家における「めぐり」を考えてきた。

→広く人間全体における「めぐり」といった問題を、今後の教学の課題としたい。

*1 佐藤金造『無手隻脚の中山亀太郎君一運命を愛し運命を活かす一』（金光教東京奉教護国会）昭和8年。

*2 相賀正実『希望に生く一中山亀太郎先生のご生涯一』金光教徒社、平成22年。